



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	渡し守の心境
Author(s)	鈴木, 栄太郎
Citation	各務同窓会報, 27
Issue Date	1939-02-20
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/77642
Type	article
File Information	A018_02_03all_Part50.pdf



るた伊達君も昨秋應召で去られ
今は助力者もない、これも銃後
の奉公と覺悟はしてゐるものゝ
さて當事者には相當の苦痛であ
る。

非常時局の朗讀は最早盡され
てゐる。自肅自戒お互に持合せ
た全力を傾注し銃後の固めに萬
全を期しにと思ふのである。

渡し守の心境

鈴木榮太郎

幸に學校は只今何事もよく行
つて居ると思ひます。慾を云へ
ばきりがありませんが、過去十
五ヶ年の學校の歴史のどのベト
でもよく知つて居ます私の眼に
は、今の状態はよく整備した時
代の一つであると思つて居

ます。學校一致の態勢が今日程
よくいつて居る時代は過去にも
餘り無かつたのでないかと思ふ
からであります。私は同窓生諸
君の母校が何等特に憂ふ可き問
題をもたず、何れの方面にも發
展の一路を辿りつゝあると云ふ
事を、誇張なしにお傳へする事
が出来ます。そして其を何より
の幸と思つて居ます。

私自身には文字通り十年一日
の如く何の進歩もなく、唯馬鞍
のみは年と共に加はり誠にお恥
かしいのですが、はしたなき渡

し守りとして寛恕して頂きます
こんな歌があります。

渡し守

人を渡しておのが身は

水棹とりつゝ

世を終るかな

然し渡し守にも、さゝやかな
矜持もあり喜びもあるのです。

四季の運行も看られるし、月明
の夜には詩興を覺ゆる事もあり
ます。此頃私は獨酌の味を覺え
夜更けて讀書に疲れた時など一
人杯を傾けて、そこはかとなく
思ひにひたる事があります。ど
うかして落涙一滴杯中に落す事
もあるのです。少し老ひて來た
んでせう。

年頭の自省

塚根千十郎

何かの雜誌で森本厚吉(法博)
が此皇紀二五九九年の年頭には
乙旗が樹てられて居る。と記さ
れて居た誠に同感である、勿論
皇軍の威力には絶對的信賴を置
くが所謂銃後の動き如何により
ては、日本の運命はどうなるこ
とか、何としても其運命の定ま
るのは今年であると思ふ。

聖戰の目的が遠大であり、國
家の使命が重大であるからには
日本民族の活力が強盛でなくて
はならぬ、それには先づ國民の